

# 05

## 時間軸をキーにした写真論

### Time axis on the photography

映像メディア学科・教授  
Department of Visual Media・Professor

安達 洋次郎 Yojiro ADACHI

## 抄録

写真家として45年。学生時代より大切にしてきた写真の本質を実践するため、広告写真家を本業としながら時間軸をベースに撮り続けてきたライフワークがある。8回の個展開催、3冊の本を自費にて出版してきた。それらのすべてのコンセプトは写真は記録である。記録以外何者でもない、という当たり前の持論を本論その1でのべる。

後半では完全にデジタル時代となった今、写真が簡単に写せるという事だけで写真が軽んじられる時代になりつつある。写真にとって大変な危機である。こんな時代だからこそ持論をベースに長いスパンで写真の力を考察する必要がある。

映像を学ぶ特に写真家を希望する若者達への私のメッセージとしてまとめた小論文である

## 序

序論にかえて私の写真家としての経歴を述べ本論にはいる。昭和37年から東京写真短期大学写真技術科(現在の東京工芸大学)で本格的に写真の勉強をする。特に主任教授である関一(せきはじめ)教授に強い影響をうける。当時は木村伊兵衛、土門拳両雄が最も活躍していたドキュメンタリィ全盛時代であった。ときあるごとに教授は我々に今を大切に常に社会の最先端にたち切れ味するどい感性で撮りまくれ、そして時代を切り取る旗手になるのだ、とハッパをかけられたものである。

卒業は東京オリンピックが開催された1964年、オリンピックの関係で親友達の多くは報道関係に進んだ。私も報道を希望したが何故か教授は私を広告写真への道を薦めた。当時はまだ商業写真と云っており、正直なところあまり乗り気ではなかったが、教授が私の性格、特性を見抜いていたのか、これからは必ず広告の時代がやってくる、と説得され資生堂宣伝部に入社した。19年間同社の宣伝広告写真を担当、主にハウスイーガンである花椿誌の撮影、男性用化粧品MG-5を始め数々のキャンペーン、セールスプロモーションのフォトグラファーとして参加する。1983年同社を退社後、

安達洋次郎写真事務所を設立し、エディトリアルも含め広告写真を主として活動し、現在に至っている。

資生堂時代も含め広告写真家として活動する傍ら、ライフワークとして数々の作品を発表し現在にいたる。

## 本論 その1

写真ほど多種多様なものはない。が故に写真には数えきれないほどのカテゴリーがあるので『写真とは』を確たる形で論ずる事は大変難しいと考えられてきた。哲学されてこなかった。しかしカテゴリー別ごとに思考すれば答えは明白である。例えば「風景写真とは」「広告写真とは」といえばその道の専門家達が『風景写真論、広告写真論』としてそれぞれの論をきちんと持っているはずである。

すべての写真をひとくくりにして『写真とは』なにかと言えば、私は“それは記録だ”としか云えない。世の中に出版されている写真論などの書籍には、当然記録は記録といいながら記録しかないといいきっている論者はいない。私は記録以外の何ものでもないと考える。

写真には大別すれば客観的に撮る写真と主観的に撮る写真がある。客観的な写真(ニュース写真)は当然として、主観的な写真(ファインアート写真)でもどんな対象物、いかなる被写体でも地球上あるいは宇宙空間に必ず存在する。写真は世に存在するあらゆる空間の中で人間が目で感知したものをレンズを通してその空間を切り取る行為だと考える。撮った瞬間、撮られた瞬間からそれらの空間(像)は過去のものとなり、その切り取られた空間と時間は完全に静止しフリーズされる。これが写真である。

世の中、時間は1秒たりとも決して止まらない。写真は人の行為(写真を撮る)によって時間を止める事ができる。止められた時間、切り取られた空間が紙に焼き付けられ(出力され)て初めてその人(作者)の写真となり作品となるのである。

写真を撮ろうという瞬間は現在、今、である。その今が作者にとって最も重要な一瞬であり、その時間を迎えるまでに何かを創造しそれをどのように表現するかを決めていなければならない。言い換えれば作者の人間性、知性、技術が一瞬のうちに閉じ込められてしまうのが写真である。そんなところに現代アートとし

ての写真に人気があるゆえんかもしれない。

付け加えるが特に主観的要素の強いファインアートとしての写真について、私は心の記録である、と声を大にして叫びたい。ゆえに写真はすべて記録である。

### 『1972411』より

私が発表してきた個展、出版した作品集を通して持論である“写真は記録以外何ものでもない”という根幹を考察し検証する。

「1972411」は1972年4月11日以前の作品をまとめた私的な写真集である。学生時代の作品、資生堂での仕事以外で何かを撮ろうと暗中模索していたころの作品をまとめたものである。当時憧れていたのはフランスのHenri Cartier-Bressonの写真で、写真は決定的瞬間をとらえたものでなければ人を感動させる事はできないと云うブレッソンに相当いれこんでいた時期である。又、仕事である広告写真の影響がストレートで説明のいらなくコピーのいらなく誰にでも理解のでき、奇をてらわないストレートな写真を追い求めていた。今、ここに写真は記録以外何ものでもないという当たり前の持論を述べるのに私はこの一冊を抜きにしては多くを語れない。久しぶりにじっくりと考察してみると、印刷はクオリティが悪く、コンセプトも曖昧で、ほとんどが私的でとても恥ずかしくて人に見せられるような代ものではない。がしかし数点の作品には完全に目が固まってしまった。

それは

返還前の沖縄那覇の市場(1970-5-1) 学生運動激しき折りのデモ(1970-6-23) 初めてのアメリカロケでみたアメリカ人とその大地(1969-10-6) 野付半島から見たいままだ帰らぬクナシリ(1970-10-25) 大学の卒業制作で撮った瀬戸の零細な陶器工場(1962-8-3) 伊勢湾台風で壊滅的被害をうけた鍋田干拓の復興した今(1963-1-2) 大阪千里で開催された日本万国博(1970-4-4) 自害した三島由紀夫の葬儀(1971-1-24) など技術的には未熟であっても大学時代の教授の言葉をしっかり守り、時代を切り取る写真家たれを実践していたのではないか。作品の1枚1枚に撮影年月日と撮影場所が記してあるみすばらしい写真集である。35年前、結婚する時の記念にと自己満足の域で作った本ではあるが時が経つことにより、写真のもっている本来の力、エネルギーを感じ取る事ができ、持論に確信をもつ

である。

写真が生まれてまだ160年あまり、機材、感光材料の進歩に合わせ、それぞれの時代にそれぞれの先人たちから伝えられてきた写真術、写真力のDNAを大学で学んだからこそ私の写真人としてのDNAを頂いた気がしてならない。

『ぐるりの人たち』、『東京日記2001』より

1974年3月に銀座ニコンサロンに於いて『ぐるりの人たち』というタイトルで初個展を開催する。『1972411』以降は資生堂に於ける広告の仕事が忙しくなり、仕事に追われる毎日であった。

新聞、雑誌などメディアの仕事が多くなり、自分の仕事がマスメディアに掲載される喜びを感じながら何一つ不満はなかった。広告の仕事は当然ではあるが創る写真が全てであったので、モデルもファッションも小道具にいたるまで一流のものが選択でき、贅沢な仕事ぶりであった。しかし求められるものは当然最高のできでなければディレクターがOKを出さなかった。苦しかったがいい勉強になった、環境には恵まれていた。創る写真が飽きたわけではないが、撮る写真(決定的瞬間)への憧れは決して捨てておらず、しつこく自分の得意なジャンルの写真を売り込み、自分のキャラクターづくりに励んだ。それには仕事以外で自分の作品を数多くづくり、ディレクターにプレゼンする事を積極的に行ってきた。

1972年以降、東京の街を撮りまくったと云うより歩き回ったと云うのが正しい。それは広告の仕事上、いろんな面で役に立った。撮影技術上もっとも重要なのはシャッターチャンスであろう、その感覚を磨くため、仕事のトレーニングぐらいのつもりでスタートしたのが『ぐるりの人たち』である。

大学時代の教授の言葉“時代を切り取る写真家たれ”が体の中に染み付いていたのか、東京という大都会のなかで生活する人々のドキュメントとしてスタートした。個展期間中にこのテーマは一生の仕事として長く続け、自分のライフワークになりうると確信した。

以降、同じスタンスで25年の間、東京の人たちを撮り続け合わせて6回の個展をニコンサロンで開催する事が出来た。

そして、ミレニアムを迎えた2001年にもっと記録を意識したコンセプトをたてて撮り始めたのが『東京日記

2001』である。

『東京日記2001』のあとがきより

東京に憧れて上京し、住みついて40年、写真を職業として38年。ライフワークとして日常の東京を撮り続けてきました。今回の出版は、新世紀の幕開けに生きた一写真人として、住み慣れた東京を自分なりに素直に記録したかった。日ごろは小型カメラでのキャンデットが主でしたが、今回は仕事で常用する少し大きめのハッセルブラッドでしっかりと撮ってみた。元旦の計画では、毎日カメラを持って東京の街を歩き回り、2001年の東京の日記をつけるのだと、スタートした。中略

上京したころの東京は東京オリンピック開催前で、戦後、最も活気があった頃。しかし、首都高速道路はまだなく、地下鉄は銀座線と丸の内線のみ、街には都電が網の目のように走っていた。東京を歩くとあの頃の風景を思い出すと同時に近頃凄い勢いで街が変貌しているのに気づく。特にこの年2001年は、ここ数年の大不況にもかかわらず、都内の至る所で大開発と銘打って大型建設ラッシュが始まっている。街の様相が一変しそうである。

大都会東京は人情味の無い街、自然の無い街と一般的に云われているが、歩いてみると、一年を通して祭りや催事の多いことに驚く。春夏秋冬と何処かでお神輿が見られるのが嬉しい。また、名所、名園、公園など、木々も多く、四季の移り変わりを充分に感じながら、野草や昆虫など小さな生き物達にも数多く出会える事ができた。中略

大都会東京は、生きている、街も、人も、自然も、ありとあらゆるものが一日一日少しずつではあるが、変わっていく。まるで大きな生き物のように、今年江戸開府400年、100年後の東京はどんな街になっているのだろうか。

『東京日記2001』より数点拾ってみると

20010121 薄氷 上野不忍池

先週より寒波が日本列島を覆っている。昨日の午後から降り始めた雪は未明にやみ、寒さが一段と厳しくなり、上野不忍の池にも薄氷が張るほどであった。

20010217 大開発始まる 六本木六丁目

今年はとくに寒かった。今日は快晴、気温が五度から七度前後だが、風がなく日溜まりはかなり暖かく

なってきた。事務所の近くの六本木六丁目第開発が始まり、殆どの家やビルが取り壊され、東日ビルだけが取り残された。ここにどんな新しい街ができるのやら。

20010331 満開に雪 江戸川橋

桜が満開というのに、朝から雪が降る。昼過ぎからはみぞれまじりではあったが、二十五年ぶりとのこと。気温が上がらず、神田川の水温の方が高かったようだ。江戸川橋より。

20010601 汐留大開発 浜離宮

汐留貨物駅跡地の開発が急ピッチで進められている。完成すれば、きっとここは江戸時代と21世紀現代を同時に味わえるビューポイントとなるだろう。

20010720 祝日 海の日 お台場海浜公園

7月20日は「海の日」として制定され、祝日となる。都内で最も近い海は、お台場海浜公園。遊泳きんしのせい、人の出はそれほどでもない。連日35度を超える猛暑。涼を求めて集まる人気スポットになってきた。

20010815 早朝の参拝 靖国神社

終戦記念日。時の首相がこの日靖国神社に参拝するか否かで大騒ぎになる日本。13日に前倒しの参拝となったものの、人々の注目靖国に集中。今日1日で例年の倍近い人たちの参拝があった。(新聞報道によると14万人)戦後56年経っても靖国問題はクリアーされていない。

20010910 台風15号東京接近 新宿副都心

台風15、16号が関東地方を直撃しそうである。雲の流れがものすごく速くて、見ていると恐怖を感じるほど。事務所から見える新宿副都心がいつもと違った雰囲気であった。次の日の夜、ニューヨークで大変な事が起こってしまった。

20011118 東京国際女子マラソン 港区 増上寺前

42.195キロをあのスピードで走りきるのだから驚く。先頭

集団はアッと云う間に通り過ぎ、数分後、一般参加の集団が通る。でも、速い。オリンピックのメダリストである有森選手に期待が集まったが、勝つことはできなかった。

20011125 皇居外苑

晩秋というのに暖かい日が続く。新聞に目をやると、ITバブル崩壊、米テロ事件や狂牛病騒動の影響、構造改革に伴う『痛み』と、不況、不況の二文字ばかり。

今月に入り、完全失業率が5.5%と過去最悪。暖かい日、ここはホームレスにとっては別天地かも。

20011201 内親王殿下御誕生 皇居二重橋前

快晴。二重橋前も昨日からのニュースのせい、早朝より多くの人たちが集まり、お祝いムードいっぱい。今日、お生まれになれば、記念写真におさまる人たちも本当の記念になりそう。午後2時43分、内親王殿下誕生。

7年の月日がたち、今、見直してみると私の考えていたコンセプトが少しではあるが実りつつある。100年後が楽しみだ。

長年のライフワークである「ぐるりの人たち」「東京日記2001」が2006年4月に(財団法人)日本カメラ財団のJCIIフォトサロンに於いて1ヶ月の作品展を開催してくれた。と同時にその作品すべてをコレクションしてくれた。これも記録としての写真を高く評価してくれたものであると私は信じている。

## その2

今、デジタル時代となり持論である「写真は記録以外何のものでもない」という観点より考察し、問題点もあげ、提言したい。

デジタルカメラの出現で写真が大きく変わり、変わろうとしていると大騒ぎしているのは写真の本質を理解していない人に見受けられる。それは銀粒子がピクセルに変わっただけであり、本質は何も変わっていない。当然技術屋さんと呼ばれる人たちにとっては大変であったろう。(カメラを開発製造したり、現像処理等に従事したり、デジタルに於けるオペレーターの人たち)世の中ITの時代になり産業構造も大きく変わり写真業界全体では大きな地殻変動が起きた事は確かである。しかし写真家にとって今までのアナログ時代に培ってきたノウハウを超えるような難しさは殆どなく、むしろフィルムでしっかり技術を身に付けてきたものにとっては実に楽な作業になり、表現範囲も数段と広がり、クオリティの高い写真が出来るようになった。一步も二歩も前進したと私は考える。当然一般の人た

ち子供たちも含め誰にでも写真が簡単に楽しめるようになった。特別な技術も必要なく、いとも簡単に撮れるようになり、完全にデジタルの時代となった訳である。

### デジタル時代になり最も危惧する点

前述したように写真がいとも簡単に写せるようになり、逆にすこし粗末に扱われるような気がする。一般家庭の写真にふれてみると、主婦達が今、可愛い我が子のために成長記録としてアルバムをきちんと作っている人はフィルム時代と比べ10%そこそこと云われている。(フィルムメーカー宣伝担当の話) やがてその子供達の成長記録として残された貴重な像が写真(紙にプリント)にされる事無く、家庭のパソコン、携帯電話のファイルのなかで像として留まっても永久に眠っているか、やがてゴミ箱に捨てられてしまい、大切な像がなくなってしまう危険がある。紙にきちんとプリントをしてはじめてPictureいわゆる写真であると云う認識をしっかり持つべきである。それが個人的なものであっても、時が経てばその人にとって貴重な記録になりうる事をしっかり理解認識する必要がある。

フィルムの時代で、一般の人にはネガの状態だけではプリントをしなければ何が写っているのかわからなかった。密着プリントから選択をし、引き伸ばしプリントにして残してきたものである。考えればフィルム代、現像代、プリント代とそれなりに経費がかかるので逆に丁寧に大切にされてきたかもしれない。

デジタル時代となり簡単にパソコンあるいは携帯電話のモニター上で像が見る事ができ、CCDに記録された像を簡単に消したり取り込んだりしてもお金もかからない。そんな安易さが大きな落とし穴になるかもしれない。「写真とは」をしっかりと認識し理解しないと一般家庭でも取り返しのつかない事が起きる可能性が大であると警告したい。

今の子供達が写真を撮る行為で始めて接するのはデジタル機能のついた携帯電話であろう。撮影者が誰であろうと、写された、写した写真は何はともあれ記録として大切なものであると云うごく当たり前の事をしっかりと子供のころから理解して覚えてもらう事が大切である。最近、写真家の団体のあいだで学校教育の図画工作のなかに「写真」と云うカテゴリーが必要である云う運動が広がりつつある事は大変に喜ばしい事

である。このような時代だからこそ今、小中学生に対してしっかり「写真とは」を伝えないといけない時である。

デジタルはフィルムに比べ持論である写真はすべて記録である云う観点から見ると数段にデジタルのほうが優れていると断言していい。それはあらゆる情報がすべて整備されているからである。私は写真は記録だとさんざん言ってきたが、撮影した日付けが(年数も含め)不明な写真は正確な記録になりえない。写真がいつ、どこで撮られ、作者がどんなコンセプトで人々に思いを伝えたいのか、そんな中で撮影した日時が大きな意味を有してくる。フィルムの時代であれば写真家のメモ、写真家の記憶に頼らなければならなかった。大きなメモリアルで忘れがたい日は記憶に残るが、普段の平凡な日々撮ったものは時が経つにつれどんどんメモでもないかぎり忘れ去られていく。そんな点デジタルカメラにはすばらしい機能がある。ほとんどのデジタルカメラに装備されているエクシブ情報と云う機能である。撮影された映像のデータの他に撮影年月日、シャッタースピード、絞り、ISO感度他あらゆるデータが撮影と同時に記録される。これはアナログ時代に育った私にとってはすばらしい機能であり私の写真は記録だという点を完璧にホローするに値するものである。しかし大きな問題としてこの機能は現在のところパソコン等のモニター上だけであって、撮影画像はプリントされても、それらの情報はディスクどまりである。デジタルの場合出力紙にプリントされた時点で初めて写真となる。ディスク上のファイルに記録されいくら鮮明ですばらしく見えてもモニター上では写真とは云えない、それはあくまでやがて再現されるであろう記号にしかすぎない。紙にプリントされ、写真となった時、ディスク上にある情報は現在では出力出来ない。人間が一枚一枚データシールを書いて出力された紙の裏にでも貼っておかないかぎり、せつかくの情報が無駄になってしまう。すばらしい情報がディスクに収録されていてもそれを使う利用者がきちんと写真の本質を理解していないと何の意味ももたなくなる可能性がある。アナログいはゆるフィルム時代、私は密着プリント上に撮影年月日や撮影場所などいろんなメモを書き込んでいた。そんな手間が完全に省け、しかも正確なデータが撮影した瞬間からインプットされるわけであるから、出力時にそれらの情報が何らかの

かたちで紙に印字できるような仕組みを早く待ちたい。と同時にきちんと写真の本質を理解し、紙のメディアにプリントした時など大切な情報をきちんと整理しておく習慣がたいせつである。

## デジタル出力による写真の保存性について

写真がデジタル時代となり、持論である写真は記録以外何ものでないと言う観点よりとくにファインアートとして出力された作品の保存性についてアナログ時代と比較しながら考察してみる。

まずアナログに於けるモノクロームのプリント、これは100年以上の実績が示すとおり完璧である。カラープリントに於いては疑問の点が多く指摘されてきた。ダイトランスファー法によるプリントがなくなり、銀塩でのカラープリントは私は全く信用していない。

私の実体験では、昼間は自然光がはいり夜は蛍光灯のごく一般的な部屋(私のオフィス)においては銀塩プリント(ネガよりプリント)は3年~5年で変退色が始まり、10年で殆ど色あせてしまった。私は写真は記録であると何回もしつこく繰り返し論じてきたが、云いたい事は永久的に像が残らないようなものは写真とは云えない。だから銀塩に於けるカラープリントは極端な言い方をすれば昔子供のころによく遊んだ日光写真(数日で像が消える)と同じ、数日できえるか数年で消えるかの違いだけである。人生80年近くになってきている現在、100年以上保たないようなものはアートとしての写真とはいってはいけない。

故に私の本業は広告写真家で、仕事のほとんどはカラーであったが、ライフワークにおける自分の作品はモノクローム以外考えられなかった。40年前の資生堂時代のカラーフィルム(エクタクローム、E-2処理)等の作品はほぼ色あせ全く悲しい運命となっている。

外式タイプ(コダクローム)以外の殆どのフィルムは保存の方法にもよるが20年~30年で変色か退色する。プリントに至ってはごく当たり前に額に入れ壁に掛ければ5年が限度である。

さてここで本題であるデジタルデータおよびデジタル出力された写真の保存性について考察してみる。デジタルデータについてはハード面が変わらなければ机上ではほぼ完璧と云われている。記録メディア(CD-ROM、ハードディスク、メモリーカード等)の性能及び耐久性の検証が必要であるが銀塩と比べれば比較になら

ないほど明るい。前述したようにカラーフィルムの保存性の悪い部分を今日ここに再生し救っているのがデジタルであるといっても過言ではない。消えかかった貴重なフィルムがデジタルスキャンされ再生出来るようになった事は多くの写真家にとって大変なる光明である。

デジタル出力された写真の保存性、これが特にファインアートのジャンルで活動している写真家にとっては最も重要な事だ。一枚の作品が永久に残って欲しいと願うのは私だけではないと思う。

私は現在、デジタル出力による写真の変色、退色度のテストを実施進行中である。途中経過を報告すると、アナログであるカラープリントよりかなり良い結果が得られた。8年前インクジェット(機種はエプソンの6色のプリンター)から出力されたカラー作品をごく普通のガラスのついた額にいれオフィスの壁に掛けっぱなしにしておいた。風評ではインクジェットから出力された写真は変退色が激しくて使い物にならないと聞いていたのだが、以外や以外、8年過ぎても殆ど出力時と殆ど変わっていない。銀塩のカラープリントよりは数段優れていることが実証できた。オフィスは前にも述べたが自然光が充分はいり常時蛍光灯をつけ一般的な明るさの部屋である。初期の6色のプリンターでインクジェットであることを考えればこれからかなり期待がもてる。現在プリンターの業界もしのぎを削ってインクの改良(顔料系インク)紙の改良等、保存性の研究が進めば銀塩でのモノクロームの域に達するのではないかと考える、とにかくプリンター業界におおいに期待したい。

上記のテストで参考意見として取り入れたのは

現在日本で最も写真の保存についての第一人者である東京都写真美術館の荒井氏の意見を参考に8年前に始めたものであり写真を展示、保存する場合、銀塩はある程度空気に触れていたほうが良く、逆にデジタル出力によるインクジェットの場合、空気に触れないようガラスあるいはセロハン等でパウチした状態が良いとアドバイスを受けていた。

現在、写真美術館におけるコレクションはほとんどモノクロームの作品である。デジタルの出現により顔料系インクにより出力された作品がコレクションされる可能性に期待したい。デジタルデータは写真に留まらずあらゆるジャンルのアーカイブとしてデータベースが構築されつつある。記録としてのデジタルは充分

に活用され始めている。

## 最後に

アナログ時代からの私の写真に対する考え方を明確にする為、また現在のデジタル時代だからこそ何ができるか実験研究を試みた。

大学で写真ゼミを担当している教員によるグループ展でその成果を発表した。Pictures diaryと云うタイトルで2006年11月末より明けて1月10日まで毎日欠かさず写真を撮り続け1日一枚、計40点の写真を発表したものである。毎日撮り続けることの作業は大変な事で、まずカメラは当然だが常に手元に、遊びも、仕事も、そして生活の中でもつねに写真のことを考えていないと時間は待ってくれない、スナップあり、ポートレートあり、風景あり、スチルライフあり、と平凡だが絵日記の如く毎日を大切に撮り続けた。まさしく自分の生活行動そのものであり、40日間の生活記録でもあった。12月29日から1月10日迄の期間中も毎日撮影し毎日作品を貼り代えて展示した。

私の生活ベースは東京である、展覧会の会場は名古屋(ワキタギャラリー)。幸運にも同じ出展者の丹羽喜郎氏がギャラリーの近くにオフィスがあり、すべて丹羽氏がプリントを仕上げてくれた。東京からパソコン上で仕上げたデータをインターネットで丹羽氏に送信し次の日の朝にはA-3にプリントして展示すると云うデジタルでなければ出来ない離れワザ、机上では可能だと考えていたが、実際に試してみてデジタルの力を身をもって知った。

この実験研究発表によりデジタル写真の凄い可能性を知ることができた。また日々日常の中で写真を通して生きる楽しさと写真の本質を改めて再確認する事ができた。作品そのものは、今は平凡なものであるかもしれないが、5年後、10年後には私にとって貴重な写真になる可能性が高い。それは写真の本質は記録であるから、数年後しっかりと検証したい。